

アルバトロス

1

二〇〇年九月三日。

ヴァルターが搭乗したアステリア行き中型輸送船は無事に航海を終え、ローレシア島の北東部に位置する海上宇宙港に降り立った。ステラマリスのユーロポトに比べたら田舎の飛行場みたいに見劣りするが、大小様々なコンテナ船が停留しているところを見ると、物流は活発なようだ。

到着ロビーでは、アル・マクダエルの右腕であるセス・ブライトが『アステリア・エンタープライズ社』と大きく記されたプラカードを持って待機している。本来、こういう仕事は別部署の担当だが、アル・マクダエルから「あいつをアステリアに連れて行く。せいぜい機嫌を損ねぬよう、特別待遇でやってくれ」と指示された以上、従わざるをえない。エンタープライズ社の専務であり、ここでは実質的にナンバーツーでもある自分が、なぜ忙しい合間を縫ってツアーコンダク

ターのような真似をしなければならぬのか、少々特点がなかなかかったが、違和感を覚えても淡々と任務を遂行するのがセスの役回りだ。

やがて到着ロビーにアナウンスが流れ、コンテナ船の乗務員や同乗したビジネスマンが大小の荷物を携えて、ぞろぞろゲートから出てくると、セスは首を伸ばしてヴァルター・フォーゲルを探したが、それらしき人影は見当たらない。一人、二人とセスの傍らを通り過ぎ、ゲートから出てくる人の姿もまばらになると、セスは（船の情報を間違えたか）とモバイル端末を探った。

と、その時、「アステリア・エンタープライズ社？」と後ろから鼻づまりみたいな声が聞こえた。驚いて振り向くと、本人だった。外国人傭兵部隊みたいなアーミーバッグを担ぎ、右手にPCバッグ、左手に折りたたみ式自転車を携えて、橋桁のルンペンみたいに立っている。服装も、色褪せたカジュアルチェックのシャツに、よれたチノパンツという出で立ちで、伸び過ぎた前髪をぶつきらぼうに掻き上げている。

内心、呆れながらも、
「やあ。ヴァルター・ラクロワ君だね」

セスが手を差し出すと、彼もぶつきらばうにその手を取り、

「で、俺は何をすればいいんだ」

と投げやりに言った。

「それは、これからゆっくり理事長が教えて下さる」

「理事長？」

「アル・マクダエル社長だ。ここでは皆、《ディレクター理事長》と呼んでいる。長年、産業振興会の理事長として貢献された。昨年、その役を退かれたが、今も敬意を込めて理事長と呼んでいる」

彼は鼻先で笑うと、タヌキの親玉みたいな面構えを思い浮かべた。

大企業のお偉いさんか知らないが、人を食ったような物言い、思いつくにつけ腹が立つ。人間、死の恐怖に勝てるはずもなく、飢えた犬ころみみたいに契約書にサインしてしまったが、彼にも、父亡き後、自分の身一つで必死に生きてきたという自負がある。

（世の中、全部自分の思い通りみたいな面をしやがって。だが、この俺はそうはいかんぞ）

と腹に据えながら、セスの後に続いた。

ターミナルビルを出ると、南国のような湿気に一瞬

むせかえったが、熱帯モンスーン気候というほどでもなく、風も爽やかだ。惑星表面積の九十七パーセントが海洋というから、もっと苛酷な世界を想像していたが、日射しも穏やかで、太陽系外惑星とは到底思えない。

ステラマリスとほとんど変わらないヤシ科の街路樹やフラワーポット、きれいに舗装されたアスファルト道路を眺めながら、ふと道路の向こうを見やった時、ミニバスの乗り場で、マックスとエヴァが山のような荷物を抱えて、四苦八苦しているのが目に入った。

二人はミニバスのバックトランクに幾つものスーツケースやポストンバッグを詰めながら、「それを横向きにしろよ」「だめよ、こっちの鞆が潰れるわ」と悪戦苦闘している。

ヴァルターはセスに断りを入れると、彼らの方に歩いて行った。

やがて入りきらないポストンバッグがトランクの間から転げ落ち、横からヴァルターがキャッチすると、マックスとエヴァが驚いて振り返った。

「あんた達は別の島に行くんだろ？」

ヴァルターが上方のわずかなスペースにポストンバ

ツグを押し込むと、マックスとエヴァも顔を見合わせ、「そうだ。もう一度、飛行機に乗り換えて、ここから二五〇キロメートル離れたローランド島に行く」

「淋しいけど、ここでお別れね。でも、いずれローレスシア島には仕事で来るから、また会いましょうね」と親しみのある口調で言った。

マックスは財布からビジネスカードを取り出し、「落ち着いたら電話をくれ。ポートプレミエルの『マリニューナイテッド社』がオレの新しい職場だ」とヴァルターに手渡した。

マックスとエヴァがミニバスに乗り込み、ここから一キロメートル離れた飛行場に向かうと、ヴァルターもセスの方に戻った。

「さっそく友達ができたのかい？」

「いや。船で一緒だったただけだ」

彼は肩越しにミニバスを見送ると、マックスにももらったビジネスカードをPCバッグのサイドポケットに押し込んだ。

「じゃあ、行こう。まずはエンタープライズ社に案内するよ」

セスはヴァルターと連れ立って地下駐車場に向かっ

た。

アステリアはU S T歴九五年、P A S第9恒星系の第三軌道に発見された海の星だ。惑星表面積の実に九十七パーセントが海洋で覆われ、青い真珠のように宙空に浮かんでいる。赤道面の直径は約九〇〇〇キロメートル、ステラマリスの七〇パーセントほどの大きさで、小さな衛星を一つ有する。

陸地もわずかに存在するが、居住可能な場所は、北半球の低緯度に位置するローレスシア島とローランド島だけで、他は自然環境の厳しい極地だったり、大洋のど真ん中に浮かぶ絶海の孤島だったり、上陸するのも困難だ。また海上に突出している岩石島の大半は、海底火山の頂部、もしくは完全に活動を停止した古い海山の一部で、いずれも人が住むには適さず、開発の予定もない。

今後どれほど技術が発達しようと、ローレスシア島とローランド島以外に都市を建設することはできず、いざれ用地不足と地価高騰に直面して、産業と庶民の暮らしに深刻な問題を引き起こす——というのがセスと

専門筋の見解だ。

一瞬、彼の脳裏に、『リング』が浮かんだが、あんな子供騙しみたいなアイデアを口にして、失笑を買うほど愚かでもない。「この海に向こうに、それを必要とする人々がいるかもしれないよ」という父の言葉も今となっては潮騒だ。彼は『リング』を意識の外に押しやると、目の前に広がる町並みに見入った。

ローレシア島はアステリア海洋開発の拠点で、全海洋で十番目に大きな島だ。北緯十一度、東経二三度に位置し、島の総面積は約六〇〇平方キロメートル、海岸線は約二〇八キロメートル、最高標高一七二メートル。上空から見ると、洋梨のような形をしている。

通年の平均気温は二十三度、冬期でも最低気温は十八度ぐらいで、亜熱帯リゾートのような気候だが、雨期は短く、台風の通り道でもない。九月初旬の今日も気温は二十六度とさほど高くないが、多湿のせいか、数値よりも少し蒸し暑く感じる。

ローレシア島の周囲には、南端部の二キロ沖合に直径三〇メートルほどの小さな岩石島と、北西に十二キロ離れた所に直径八キロメートルのパンゲア島があるが、いずれも無人島だ。パンゲアといっても小豆の

ような裸島で、五十年前から建材用の砂利を採掘している。また僅かではあるが、天然ガスも採掘している。

一方、マックスとエヴァが向かったローランド島は、ローレシア島の東方二五〇キロメートル先にあり、ローレシア島より遅れて開発が始まった。ローレシア島より一・四倍大きいのが、面積の八〇パーセントが山地で占められ、海岸線も大半がリアス式海岸であることから、ローレシア島ほど開けていない。現在、西海岸のポートプレミエルと東海岸のペネロペ湾を中心に急ピッチで都市開発が進んでいるが、複雑で険しい地形から、ローレシア島ほど都市圏が拡がることはないと言われている。

セスが運転するセダンは陸橋を渡り、ローレシア島の東沿岸を走る『A-I幹線』と呼ばれる片側二車線の湾岸道路に合流すると、エンタープライズ社に向けて一気に南下した。

ここ十数年、ローレシア島の発展はめざましい。

六十五年前、最初の海洋化学工業『JPSODA』が北西部のメアリポートに設立され、工業用の水酸化ナトリウムや酸化マグネシムの製造に成功すると、様々な関連産業が進出し、町並みも海岸に沿って東西に

広がった。

宇宙港のある島の東部には、三つの埠頭からなる工業港、倉庫街、オフィス街が広がり、見た目はステラマリスの地方の港湾都市とさして変わらない。

人口は短期滞在者も含めて七万人弱、それで、これだけの係留施設や貯蔵設備、道路、橋梁、通信などのインフラを完備しているのだから、意外と生産性は高いのかもしれない。

彼は想像以上に活気のある港町を眺めながら、「北海沿岸みたいだ」と呟いた。

「そうだろうね。建設にあたっては、ステラマリスから技術者を招聘したから。必然的に似たような町並みになる」

「トリヴィアに技術者はないのかい？」

「高等教育機関で海洋学や造船工学を教えるようになったのは、ここ二十年ほどの話だ。それ以前は全面的にステラマリスの専門家に頼ってた」

「あなたは何処から？」

「ステラマリスだ」

「スペイン語圏だろ」

「……よく分かったね」

「港で働く、いろんな国の人と接する。流暢に英語を話す人でも、どこか母国語の癖が残っているものだ。人種や文化が入り交じっても、母国語だけは親から子に確実に受け継がれるからね。あなたは長いのかい？」

「かれこれ二十八年だ」

「母国に帰りたいと思わない？」

「さほどにはね。所帯をもてば、そこが自分の故郷になる」

（そんなものかな）と思いながら、再び窓の向こうに視線を巡らせる。

さらにA1幹線を南に下ると、もう一つ、入り江を利用した小さな船着き場がある。工業港ほどではないが、精密機器の工場を中心に新たな産業セクションとして開発が進んでいる。エンタープライズ社もここに第二倉庫と専用バースを構え、採鉱プラットフォームの補給基地にしている。

やがて船着き場のロータリーに差し掛かると、三つ目の出口を右折し、内陸に向かう二車線道路をそろそろと上がった。

MIGの採鉱事業を統括するアステリア・エンター

プライズ社は小高い丘の中腹にある。

周囲に建物は無く、常緑高木に囲まれた中にぼつんと立っているが、敷地は広々として、美しいエクステリアには花壇や人工池もある。建物も横広がりの四階建てで、前面のガラス製カーテンウォールがモダンな水族館みたいだ。

セスイわく、エンタープライズ社の位置づけは、MIGとは完全に独立したアル・マクダエルの持ち分会社らしい。MIGが非上場の株式会社であるのに対し、エンタープライズ社は百パーセント自己資本で設立された有限責任会社で、経営もアル・マクダエルを頂点とするトップダウン方式である。MIGにとって最もリスクリーな採鉱事業の一部を「後方支援」の形で上手に分散し、万一失敗しても、ダメージがMIG全体に及ばないよう取り計らっている。

また自己資本のメリットを生かして、物流、ディベロップ、海洋開発コンサルタントなど、MIGとは畑違いの事業を展開し、そこで得た利益を採鉱プラットフォームの開発維持費に充てるというユニークな戦略も取っている。

「だが、なぜそんなにまでして海底鉱物資源の採掘に

こだわらるんだ？ ネンプロットに行けば、全長三〇〇メートルの無人掘削機がガンガン露天掘りしてると言うじゃないか」

「それは一部の金属鉱山や、石灰や陶石や珪石みたいな非金属鉱床に限った話だ。希少金属、とりわけニムロディウムはそうじゃない」

「未だに奴隷が手掘りしているとでも？」

「機械は使っているが、それに限りなく近い。TVのドキュメンタリー番組などで目にしたことはないか？」

「いや」

「だったら、一度は見ておくんだね。宇宙文明を支えているのは科学技術ではなく、鉱害病でポロポロになった人の手だから」

セスは地下駐車場に車を駐めると、彼を三階の休憩室に案内した。手前の広いスペースにはラウンジ型のソファセットとコーヒーメーカー付き簡易キッチンがあり、その奥にはカーテンで仕切られたブースが三つもある。

「君も疲れただろう。三時間ほど休憩するといい。どのみち、僕も夕方にならないと時間が空かないし、今

日中に全てを説明するのは無理だからね。すぐに昼食を運ばせるよ。事務の女の子がいつもグループで利用している中華料理のデリバリーだ。食後は向こうのブースでゆっくり身体を休めるといい。ヘッドセットとマッサージ付きのリラックスシートがある」

「至れり尽くせりだね」

「これくらいしないと、僻地の会社に良い人材が集まらない。職員の半数はトリヴィアからの移住者だ。心身の健康管理も企業投資の一つだよ」

「なるほど」

「それと、もう一つ。環境の変化で頭痛や吐き気に悩まされるかもしれないが、一過性のものだ。どうしても我慢できなければクリニックを紹介するから、遠慮なく言ってくれ」

セスが休憩室を出て行くと、入れ替わるように女性事務員が大きなトレイに食事を運んできた。鶏肉の唐揚げと焼き飯と野菜炒めのランチセットだ。からりとした醤油味が香ばしく、何所に行っても中華料理が充実しているのはアステリアも同じらしい。

それにしても、このヨードが腐ったような匂いは何なのか。車に乗っている時はさほど感じなかったが、

建物に移ってから鼻に付くようになった。室内を見回しても特に原因となる物は見当たらず、どうやら感屋固有のものらしい。頭痛や吐き気とまではいかないが、しばらく不快感は続きそうだ。

食事が終わると、窓際のブースに足を運び、革張りのリラックスシートに横になった。アームレストのパネルを操作しながら、マッサージより酸素吸入器が欲しいと思う。

眼を閉じると何故かしら母の顔が浮かび、何も告げずにここまで来たことが悔やまれたが、今更話したところで全てが元に戻るわけでもない。それに、さつきセス・ブライトに手渡した『死亡時意思確認書』のコピーが数日後にはラクロワ邸に届く。母は腰を抜かすだろうが、どうせ死に体も同然だ。いっそ息子は死んだものと諦めて欲しい。

それにしても、あんな書類を書かせるところを見ると、よほど危険なミッションなのか。

(まあ、いいさ)と彼は寝返りを打った。

何所で死のうが、生きようが、俺にはどうでもいいことだ。

それから二時間ほどぐっすり眠り、ふと意識が戻った時、カーテン仕切りの向こうから女性が呼びかける声が聞こえた。四階の専務室に行つて欲しいとのことだ。

未だすっきりしない身体に鞭打つて四階に上がり、『senior executive director』のプレートが掛かったローズウッドのドアをノックすると、シヨートヘアの中年の女性秘書が丁寧に迎えた。名前はロサ・ケアリーという。

ミズ・ケアリーは秘書室の続きにあるセスの執務室のドアをノックすると、彼を中に通した。専務の部屋にしてはこぢんまりしているが、L字型のプレジデントデスクに大小二台のデスクトップモニターを置き、周辺機器はキーボードとトラックボールのみ、余計な書類やアクセサリはいっさい置かず、この人らしい仕事場だと思つた。

セスは彼に革張りのオフィスチェアをすすめると、二十三インチの大型ディスプレイをぐるりと彼の方に向け、「まず君にアステリアの地理と採鉱事業の概要について説明するよ」と衛星写真を映し出した。

アステリアは丸く磨き上げた董青石(ウォール)のように宇宙空間に浮かび、ステラマリスとは違った美しさがある。島も大陸もほとんど無く、まるで水だけが絶対零度の空間に結晶したみたいだ。

その中で、北半球の赤道付近に浮かぶローレシア島とローランド島は、西と東に向かい合う二つの勾玉のように見える。一見、離ればなれの小島だが、どちらも巨大プレート上に連なつた火山起源の高まりだ。大きさは、ローレシア島が全長五十一キロメートル、ローランド島が全長一〇〇キロメートルだが、大海原においては向かい合う二つの勾玉にしか見えない。

「よくこんな小さな島に産業基地を築く気になつたな」

「海を有さないトリヴィアにとつて、貴重な工業原料の供給地だからだ。海水から効率的にミネラルや金属成分を回収し、粉末や半製品にして移出している。ステラマリスやネンプロットから仕入れるより、はるかに安価で良質だからね。それに魚や海鳥がなくとも、海は『海』だ。観光地としての魅力もある。今、その価値がようやく見直されているところだ」

「今後の展望は？」

「それは君次第だよ」

セスはローレシア島とローランド島周辺の3D海底地形図に切り替えた。

海底地形図は十メートル単位の精度で描出され、深さによって色分けされている。深くなるほど青く、浅い部分は赤色で表示される。海底にも山や谷や平原があり、惑星規模の地殻活動によって絶えず変化している。もしアステリアの海水が全部干上がったら、目の前にはグランドキャニオンのように壮大な地形が広がるだろう。

ローレシア島とローランド島の土台になっているのは、『テティス・プレート』と呼ばれる微小大陸だ。東西幅三〇〇キロメートル、南北幅八〇〇キロメートル、総面積二十二万平方キロメートルの落花生型の微小大陸で、その基部は平均水深四〇〇メートルの海底にある。上空から見れば、ローレシア島とローランド島は大海原に浮かぶ二つの勾玉みたいだが、その正体は水深四〇〇メートルの海底からドンとそびえ立つ巨大な山塊の頂部だ。

「この巨大な山塊は比較的短期間に大噴火を繰り返して形成された。過去にはかなりの部分が海面上に突出

していたが、徐々に沈水し、現在、山塊の九十パーセントは、水深数百メートルから数千メートルの海中に没している」

「海面上に突出していた」というのは、どうして分かった？」

「ここから三八〇キロメートル離れた北方にウェストフィリアという大きな島がある。この土質や堆積岩と地質学的に共通点が多い。またテティス・プレートに連なる北の海山群には、プリンのような形をした平頂海山が多く、大昔には大部分が海上に突出し、沈水する過程で山頂が波に削られ、平らになったと思われる。それにパンゲア島周辺の堆積物から大昔の植物らしきものが見つかっている。もっとも推測の域を出ないがね」

「植物？」

「植物といっても、いわゆる草花や樹木の類いではなく、葉緑体を持つ原生生物だ。数千万年前には、海上に突出した島の表面に大量に繁殖し、光合成を行っていた可能性がある。だが、かなり最近、急激に海面が上昇して、何もかも水中に没した。『最近』といっても、数百万年から数千万年単位の話だけでも」

セスはさらに海底地形図を拡大し、ローレシア島とローランド島にフォーカスする。

二つの島の間には幅一五〇キロメートルの地溝のようない凹みが存在し、テティス・プレートもこの凹みの境に、左右に引き延ばされているように見える。凹みの底部には、大小様々な海山や海丘が数珠のように連なり、まるで地底から強い力で押し上げられた如くだ。

わけてもローレシア島に近接する台形状の高まりは、横幅一〇〇キロメートル、縦幅八〇キロメートル、高さ一〇〇〇メートルに及び。さながら海底の谷間に鎮座するエアーズロックだ。

「この高まりは『ティターン海台』と呼ばれている。凹みに存在する海山の中で最大だ。その基礎岩は、ウエストフィリア島の火山で採取される火成岩と組成が非常によく似ている」

「つまり、大量のマグマの噴出で形成されたということ？」

「今はまだ推測の域を出ないが、大昔、ウエストフィリア島とテティス・プレートが一つに繋がっていた頃、同じ火山活動で形成された可能性が高い。形成された年代は数億年前と推測される」

「逆に、ウエストフィリア島がテティス・プレートから切り離されて、北上したと考えられないか？ この星のプレート理論は？」

「さあ、そこまでは」

「なんだ、知らないのか」

「ここはステラマリスとは違う。惑星規模の海洋調査もほとんど進んでないし、詳しく分かっているのはローレシア海域だけだ」

「よくそれで海底鉱物資源を採掘しようという気になったな！」

「石油やダイヤモンドだって、起源もメカニズムも定かでないのに採掘してるだろう。それもハイテク技術が誕生するずっと以前からだ。乱暴な言い方をすれば、経済において科学的根拠は大した問題ではない。石油やダイヤモンドがどのように形成されたか、確かな事は分からなくても、燃料になり、アクセサリーとして売れば事足りる。海底鉱物資源も同じだ。起源やメカニズムの解明は科学の領域であって、僕らの課題はいかに採掘し、どれだけ利益を上げるかにある」

「実際のだな」

「ビジネスとは、そういうものだよ」

セスは画像を回転すると、ローレシア島からティターン海台に至る側面図を写しだした。

「これがローレシア島とティターン海台を横から見ただけの地形図だ。ローレシア島はティリス・プレートと西半分、凹型の谷で分断された左側のプレートの縁に乗っている。島の東側の海底地形は二〇キロメートル沖から一気に落ち込み、水深四〇〇メートルの深海底に達する。その続きに存在するのがティターン海台だ。ティターン海台は凹型の溝をすっぽり埋め尽くすような形で盛り上がり、海底面からの比高は約一二〇〇メートル、頂部は水深三〇〇メートル下にある。全体になだらかな台形で、噴火口などは見当たらない。そして計測が正しければ、凹型の溝と一緒にティターン海台も東西に引っ張られ、年に一センチの割合で横に拡大している」

「再び激しい地殻活動を起こす可能性はゼロ？」

「それを言い出せば、百パーセント安全な場所など無いよ。ただ一つ確かなのは、ティリス・プレートにおいて現在も活発に噴火している海底火山はないし、体感的な地震もゼロだ。もっとも、我々が気付いてないだけで、数千メートルの深海では、日夜ダイナミック

な動きがあるかもしれないがね。だが、それを調べるには、お金もないし、機材もない。深海調査の高度技術者もなければ、研究する人も僅かというのが現実だ」

「どこも同じだな」

「そうだ。海洋調査は陸上の地質調査と違って、とにかく金がかかるし人手も要る。よほどの利点がなければ着手しない」

「にもかかわらず、ティターン海台のニムロディウムを採掘すると決めた理由は？」

「そう、それが肝心だ」

セスは、幾つかのニュース記事やドキュメンタリー番組を見せながら、この一世紀のうちにトリヴィアやネンブロットで起きたことを簡潔に説明した。

「Anno Dominiの末期、無人探査機パイシーズが、みなみのうお座星域から一つの鉱石を持ち帰った。そこから発見された新元素ニムロディウムが恒星間飛行を可能にし、宇宙構造物の技術を劇的に変え、本格的な宇宙開発時代が幕を開けた。ニムロディウムはさながら魔法の添加物だ。鉄や銅などのコモンメタルに微量に添加することにより、超高温、超高压といった過酷

な環境に耐える強力な超合金を作り出す。有害な宇宙線も完全にシャットし、耐性も驚くほど高い。まさにスーパーマテリアルだ。だが、時代遅れな宇宙開発法の隙を突いて、ファルコン・マイニング社がニムロデ鉱山を手中に収めてから世界の構図が変わった。本来、自由と公正の証しである「宇宙の領土はいかなる国家にも属さない」という宇宙開発法の解釈をねじ曲げて、ニムロデ鉱山の大鉱床を手に入れ、ニムロディウム市場を独占したんだよ。以来、ファルコン・マイニング社は国際社会を左右するほど強大な力を持つようになった。なにせニムロディウムが無ければ、宇宙船も飛ばないし、宇宙植民地の地熱ジェネレーターも作動しない。供給がストップすれば、トリヴィアの大都市も数週間で機能停止に陥り、宇宙植民地に居住する三億の人間があつという間に死滅する。いわば宇宙文明の命綱だ。そして、この一世紀、鉱業のみならず、政治経済、産業、学界までもがファルコン・マイニング社の影響下に置かれ、このまま独裁が続くかと思われたが、U S T 歴一十五年、画期的な精錬技術が誕生した。『真空直接電解法』だ。この精錬法を用いれば、低品位のニムロイド鉱石からも高純度のニムロディウムを

効率よく精製することができる。開発したのはノア・マクダエル。理事長の祖父で、M I G の基礎を築いた人だ」

「なるほど。一家総出でファルコン・マイニング社に反撃ののろしを上げたわけだな」

「私怨ではない。技術革命だ。ニムロディウムは激しい噴火や大きな地殻変動によって惑星深部から地表にもたらされ、鉱床の大半は地下数百メートルの大深度に存在する。高品位のニムロディウム鉱石を採掘する為に、地下数百メートルから数千メートルの坑道を掘り、摂氏四十度近い高温多湿の環境で、重さ二〇キロのマシンを抱えて何年も岩盤を掘り続けければ、人間の身体がどうなるか、君にも想像がつくだろう。この宇宙文明の時代に信じられないかもしれないが、未だにそうした光景が鉱山の至る所で見受けられる。非法の採掘現場も含めてだ。だが、大量のニムロディウムを含む鉱物が海底から完全自動化で採掘され、より簡易な方法で精製できれば、鉱業も、金属業も、産業全体が変わる。ニムロディウムのみならず、海底鉱物資源の活用が進めば、世界の構図も変わるだろう。我々の目指すゴールは技術による革命だ。そして、ティ

ターン海台の採鉱プラットフォームがそのエポックとなる」

「大層なことだ」

「でも、ちょっとはアステリアの海に興味が湧いただらう」

「ちょっとだけな」

セスはモニターをオフにすると、デスクの引き出しを開き、一枚の書類を差し出した。

「機密保持の同意書だ。君も組織で働いた経験があるなら分かるだろうが、採鉱プラットフォームに関する情報も、職種や階級によってアクセスが厳しく制限されている。特に採鉱システムと海底鉱区に関する情報はトップクラスの機密だ。外部に漏らせば罪に問われるから、そのつもりで」

「だが、アステリアの海底鉱物資源は外部に知られてるんだらう？」

「存在だけだよ。どこに、どれだけ賦存し、どのように採掘するかを知っているのは、プロジェクトチームの上位スタッフだけだ。製錬方法や合金設計は、さらに限られる。一般には『深海の堆積物』ぐらいにしか認識されていない」

「俺の場合は？」

「これから何でも知ることになるよ。だが、その前に機密保持契約書にサインだ」

ヴァルターはセスから電子ペンを受け取ると、ぶっきらぼうに『ヴァルター・ラクロワ』とサインした。

「これで君もお仲間だ。もう逃げるに逃げられないな。明後日、朝十時に理事長がお見えになるから、そのつもりで」